

仕舞ふかもしれない、そのうへ少し靜かにしてゐると、ヤマメや鮎ハエや鱒なんか、何處からか出て来て、悠悠と水底をさまよつてゐる、ツと出て来たかと思ふと、またツと引込む奴も居る、五尾六尾連だつて、水の流れに逆らひながら徐かに川上へゆくのもある、こんな時に、ハつ迄く／＼見てゐて飽きるといふことがない、主人の寫生の冀くは長かれと祈るのはこの時ばかりだ。冬の日、風ふく夕や雪ふる且あしたに引張り出されるは、辛いは相違ないが、そんな時は主人も苦しいと見えて、偶さかではあり時間も長かアない、大テイは砂暖かき東海の濱か、日だまりのボカ／＼してゐる崖の下なんかだから、毎日ストーヴの傍に引こもつてゐるよりは却つて氣が晴れて可い。

△ △ △

ランスダウン侯の所藏にかゝるレムブランドの描いた「水車」と云ふ有名な畫が近頃百萬圓で賣れたとかいふ評判があつたので物數奇が眞偽を調べて見たら嘘であつた。然し此畫家の千六百五十八年に描いた自己の肖像が、つい先頃矢張り百萬圓内外の高價でピツバードで賣買になつた事は慥な事實である。生前には食ふや食はずの畫工の價が、死ぬや否や急に暴騰するのは、本人に取つては無論だが、見物してゐる世間から云つても實に悲しむべきアイロニーである。ミレーが窮乏の裡に世を去るとすぐ、彼の傑作を非常の高價で買ひ取た奴がある。買ふ位なら何故生きてゐるうちに買つてやらないのか。金持は是程冷酷に

金を使ひながら、自分では自分の酷薄な事に氣が付かずにゐる。(東京朝日)

△ △ △

水彩畫は近來長足の進歩はしたが、油繪に比しては遅れてゐる——その遅れたのは發足點にあつて、日本に入つた洋畫といへば即ち油繪が先であつた、それで洋畫といへば油繪といふ風になつた——繪の稽古には皆佛國へゆく、佛蘭西では英吉利のやうに水彩は發達してゐない、風景畫よりも人物畫が盛んだ、佛に學んだ人は多く人物畫家になつて仕舞ふ、中村、満谷、黒田、和田、岡田の諸君のやり方を見れば分る、比較的佛の影響を受けない中川吉田君は風景が主で、全然外國に學ばぬ山本氏など風景畫だ——日本人は自然の風景を愛し、日本畫でも傑作は多く風景にある——水彩畫は風景を畫くに適してゐる、日本人の趣味に適してゐるから將來は必らず發展する、展覽會などで人氣の油繪にゆくは今日では不得止事で、實際作品の上でも劣つてゐやうが、自然の要求はいつ迄も今日の儘ではない、いづれ吾々の時代も來るに極まつてゐると確信して努力してゐる——この確信は一に後進諸君の勉勵如何にある(大下藤次郎氏『水彩畫の將來』時事新報)

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*